『レオニー』 原題：Leonie

配給：角川映画　2010 年 11 月 20 日（土）全国ロードショー
公式サイト：http://www.leoniethemovie.com/

製作・脚本・監督：松井久子（『ユキエ』、『折り梅』）
原案：ドウス昌代著『イサム・ノグチ～宿命の越境者』（講談社刊）
出演：エミリー・モーティマー（『マッチポイント』、『シャッターアイランド』）
中村獅童、原田美枝子、竹下景子、クリスティーナ・ヘンドリックス
メアリー・ケイ・プレイス、勅使河原三郎、吉行和子

ストーリー

フィラデルフィアの有名女子大学を卒業したレオニーは、編集者になるという夢をあきらめられず、ニューヨークで教鞭を執っていた。そんなある日、たまたま見つけた新聞広告によって、日本からやって来た詩人ヨネ・ノグチ（野口米次郎）の編集アシスタントという職を得る。レオニーが編集を手伝ったヨネの詩や小説は、英米文壇でセンセーションを巻き起こす。二人一緒の時間が増える中で、レオニーはヨネと親密になり、ついに結ばれる。

しかし、幸福な日々は長くは続かなかった。レオニーは妊娠するが、ヨネはそれを嘘だと罵り、日本へと帰ってしまうのだ。レオニーはカリフォルニアに住む母親のもとで一人子供を育てていく決意をし、無事、男の子を出産する。しかし、日露戦争での日本勝利のため、アメリカでの日本人差別が激化する。レオニーは必死に止める母親の声を無視し、レオニー母子の世話をするというヨネを頼りに一度も訪れたことのない日本へと向かう。
レオニーと再会したヨネは、始めて見る息子にイサム（勇）と名づけた。ヨネによって、住まいと英語教師という職を得安定した生活を送っていたレオニーだったが、ある日、ヨネに正式の妻がいることを知り、イサムを連れ、家を飛び出す。その後、知り合った小泉八雲の妻セツの親切で彼女のもとに身を寄せるようになる。そんな中、レオニーは再び、妊娠し、女児を出産、アイリスと名づけるが、その父親の名は誰にも告げることはなかった。

ある日、レオニーは家を建てることを決意する。それは、不登校を続けるイサムのためだった。設計を任されたイサムは富士山がより美しくみえるようにと、母親に丸窓を贈る。イサムの芸術的才能を確信したレオニーはイサムを単身アメリカへ送り出す。

第一次大戦勃発後、イサムとの連絡が途切れてしまうが、数年後ようやくニューヨークで再会することとなる。イサムは医者を志していたが、レオニーの強い説得に背中を押され、芸術家への道を再び歩みだす。夜間の美術学校に通いながら学んでいたイサムは、小さいながら初の個展を開いた。
子供たちの成長を見守ってきたレオニーは、自分の役目は終わったという安堵感とともに、残りの人生を自然の中で

edited by m. tsukada　© 2010 ATEM. All right reserved.

一人生きていくことを決意する。

・ レオニーは英文編集に応募し、ヨネをはじめて訪れた。
アメリカ滞在中の詩人ヨネ・野口（中村獅童）がレオニー・ギルモア（エミリー・モーティマー）を、英語で説得する演技はみごとである。

・ レオニーはわが手で息子イサムを育てようと決意する。

・ レオニーは息子イサムに英語の本を読ませている。

・ 仕事からの帰路、山里の小道を歩きながら、
レオニーはいつも息子イサムに語りかける。

コメント

久東 仁美 （映画英語教育学会）

レオニーがどのような女性であったのか。それは、まだ大学生であったレオニーが、後に生涯の友となるキャサリンに言い放つ一言に凝縮されている。

> “Don’t bore me by being ordinary.”
> 「平凡な人間なんて、つまらないわ。」

このセリフは、既成の枠に囚われないチャレンジャーとしてのレオニーのキャラクターを表すとともに、その後の彼女の人生そのものを予言しているようにさえ思われる。祖国アメリカでも、そして単身乗り込んだ日本でも因習的な女性像に縛られ自由を奪われるレオニーは、社会の表舞台から去らざるをえなかった。これまでの伝記映画が取り上げてきたような歴史的重要人物というわけでもない。たしかに、本作で示されているように、レオニーの意志力は特筆すべくものだろう。ただでさえ生き抜くことが困難であった時代に、たった一人で立派に子供を育て上げることができたのは母レオニーの人並みならぬタフな精神力であったし、一度は医者を志したイサムが芸術家としての夢

edited by m. tsukada © 2010 ATEM. All right reserved.

を再び追うことを決意したのも、母レオニーの強い説得があったからである。いわば、“イサム・ノグチ”としていう天才を創造したのはレオニーであり、それゆえ影の功労者として身を潜めてはいけない存在だ。だからこそ、松井監督は彼女を世に出さねば、という思いを断ち切ることができなかったのだろう。

しかしながら、本作を見ていると、レオニー・ギルモアという偉大な女性の伝記映画というよりは、最後まで生きることを止めなかった一人の人間の壮絶な生き様を見せつけられたという気がする。周りの世界がどんなに変わろうが、どんなに世間が彼女に冷たく当たろうが、とにかく彼女は命の炎が消えるまで、生きて、生き続けたのだ。この映画でレオニーから学ばせられることは、とにかく生きることを止めない限り、人間は際限なく変化していくものであり、現在以降の自分は常に新しい自分なのである、ということだろう。“生きる”ということは、本当はそんなに難しいことではなく、ただ息を吸い、吐いて、その時々自分のなすべきこと、自分のできることを一つずつ片付けていく、それだけのことなのかもしれない。そして、そういう生き方が決して無意味なことではないということをレオニーは証明してくれる。彼女亡き今も、イサムと彼の芸術を通して、レオニーの声をわたしたちは聞くことができるのだから。

“Your art will be your weapon.”
「あなたの芸術は武器。」
“Your art will be your voice.”
「あなたの芸術は声。」
“There're no boundaries for an artist. No border.”
「芸術家には限界がなく、国境も存在しない。」
“Through art, you can speak all languages and live a magnificent life anywhere.”
「芸術をとおしてあらゆる言語を話し、どこででも素晴しい人生を歩むことができる。」

監督プロフィール

松井久子（まつい　ひさこ）

早稲田大学文学部演劇学科を卒業後、「週刊平凡」「アン・アン」等の雑誌ライターを経て、1976年、俳優プロダクション㈲イフを設立。数多くの俳優のマネージメントを手がける。1985 年、㈱エッセン・コミュニケーションズを設立し、多数のドラマ・旅情報・ドキュメンタリーのテレビ番組プロデューサーとして活躍。

映画初監督作品『ユキエ』で（1998）では、脚本に日本映画界の巨匠、新藤兼人を迎え、アルツハイマーに犯された日本人妻とそれを支えるアメリカ人である夫との愛を、アメリカ・ルイジアナを舞台に描き、国内外で高い評価を得る。第 2 作『折り梅』（2002）では、自ら脚本も手がけ、アルツハイマーを発症した義母と、その世話をする嫁・その家族との葛藤が、血のつながりをこえた信頼関係を創出していく過程を老人介護を軸に描き、公開から 2 年間で 100 万人の観客を動員した。

両作品の自主上映会は、今もなお日本各地で開催されており、『ユキエ』は 700 ヶ所、『折り梅』

edited by m. tsukada　© 2010 ATEM. All right reserved.

は 1250ヶ所を越える。この観客との密なつながりは、最新作『レオニー』でも世襲されており、監督の熱意に賛同するサポーターによって、「松井久子監督の第三作を応援する会　マイレオニー」が設立・運営されている。

edited by m. tsukada　© 2010 ATEM. All right reserved.